

2 キウス4遺跡における周堤墓外の墓墳について

キウス4遺跡では周堤墓に伴う墓墳の他に、ほぼ同じ時期に作られた周堤墓外の単独の墓墳も見つかっている。この周堤墓外の墓墳は①南側盛土より南側に分布するもの、②南北盛土の開口部、建物跡群や住居跡群の中に分布するもの、③北側盛土より北側に分布するもの、④周堤墓群周辺に分布する周堤墓外のもの、の大きく4つに分けることができる(図Ⅲ-4)。

ここでは、その4ヶ所の墓墳のまとめ＝墓墳群について簡単にまとめ、それぞれの墓墳群間、および周堤墓内の墓墳との関係について考えてみたい。

①南側墓墳群 (I・R地区に分布するもの、図Ⅲ-5・6)

I地区で13基、R地区で1基の合計14基が墓墳とされている。このうち、I地区の3基(I・L・P-11・21・24)は形状や埋土の状況が他と異なるため、少なくとも後期後葉の墓ではないと考えられる。逆に、記載は無いが規模や埋土などから1基(I・L・P-13)は墓墳と推測される。このため、合計12基が本群に該当する。

本群の12基は調査区全域に散在しているが、2基が長軸方向を揃えて隣接しているものが3組見られる。平面形は長楕円形で周堤墓の墓墳に類似している。遺体層やベンガラ、副葬品、墓標が確認されたものは無い。墳底面長軸長が150cmを超えるものは3基のみで、小型のものが多い。

なお、R地区の1基はI地区に近いもので、盛土辺縁部を切って構築されており、盛土遺構よりも新しいものである。

この南側墓墳は南側盛土の外側(南側)に位置し、貯蔵穴群と隣接している。また、規模は長軸長が100cm以下のもの、100～150cmのもの、150cmのもの大きく3つに分かれそうであるが、周堤墓の墓墳よりも概して規模が小さいと言える。

②南北盛土間墓墳群 (Q・R地区に分布するもの、図Ⅲ-7・8)

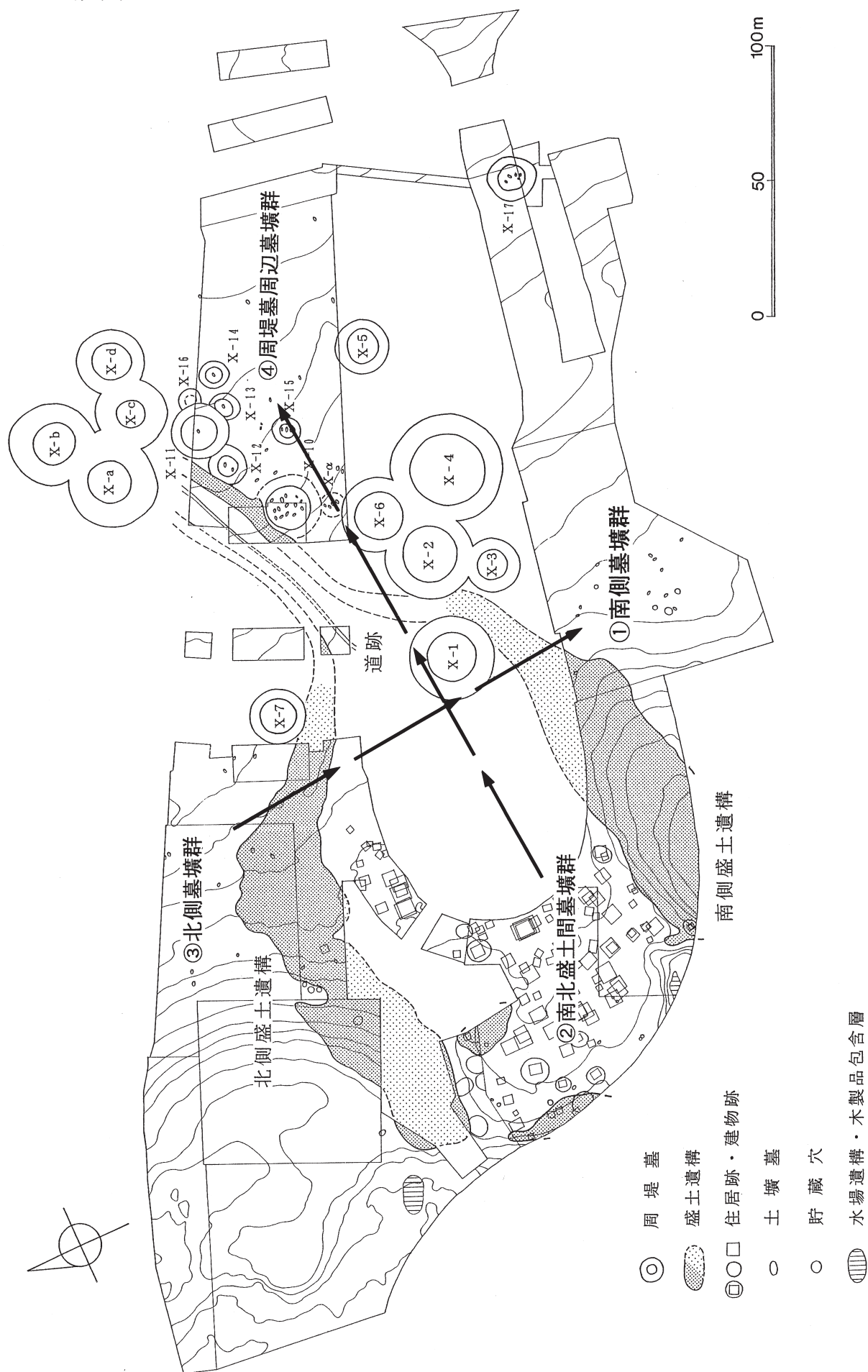
R地区の1基およびQ地区の8基が墓墳であるとされているが、うち1基(P-199)は時期不明である。分布に偏りは無く、調査区全域に散在するが、2基が長軸方向を揃えて隣接しているものが2組見られる。人骨が検出されたもの1基、遺体層とベンガラが確認できたもの4基、ベンガラであるか不明な赤色土が確認できたもの1基である。副葬品や墓標が確認されたものは無い。また、建物群やそれに付属する柱穴群に切られているものが2基ある。

長軸長は全て150cm以下である。短軸長は60cmを境に上下に2分されそうである。いずれにしても規模が小さく丸みを帯びたものが主体となっている。また、他の墓墳群に比べてベンガラ撒布例が多いことも特徴である。

この南北盛土間墓墳群は建物跡群と重複する位置にあり、切り合いからそれよりも古いものである。墓墳埋土内に混入する遺物が非常に少ないこと、P-111で出土した土器は幅が広めの沈線鋸歯状の文様が施文されていることから、キウス4遺跡が営まれた時期の中ではやや古く構築されたものと推測できる。

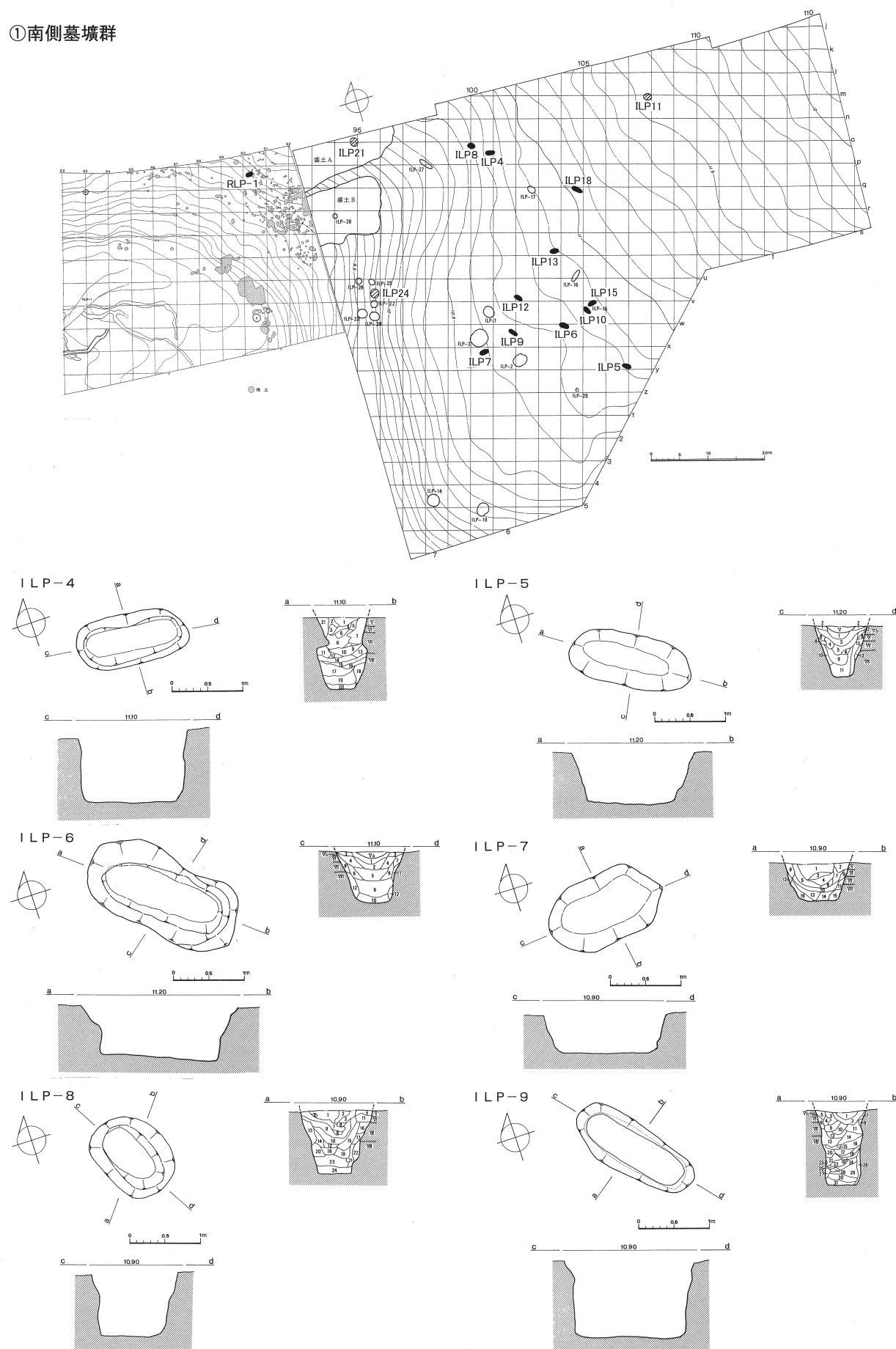
③北側墓墳群 (F・G地区に分布するもの、図Ⅲ-9・10)

14基が確認されている。この内、北側盛土直下から検出され、盛土遺構よりも古いものが4基ある。遺体層もしくは人骨が検出されたものは4基である。分布に偏りは無く、調査区全域に散在するが、



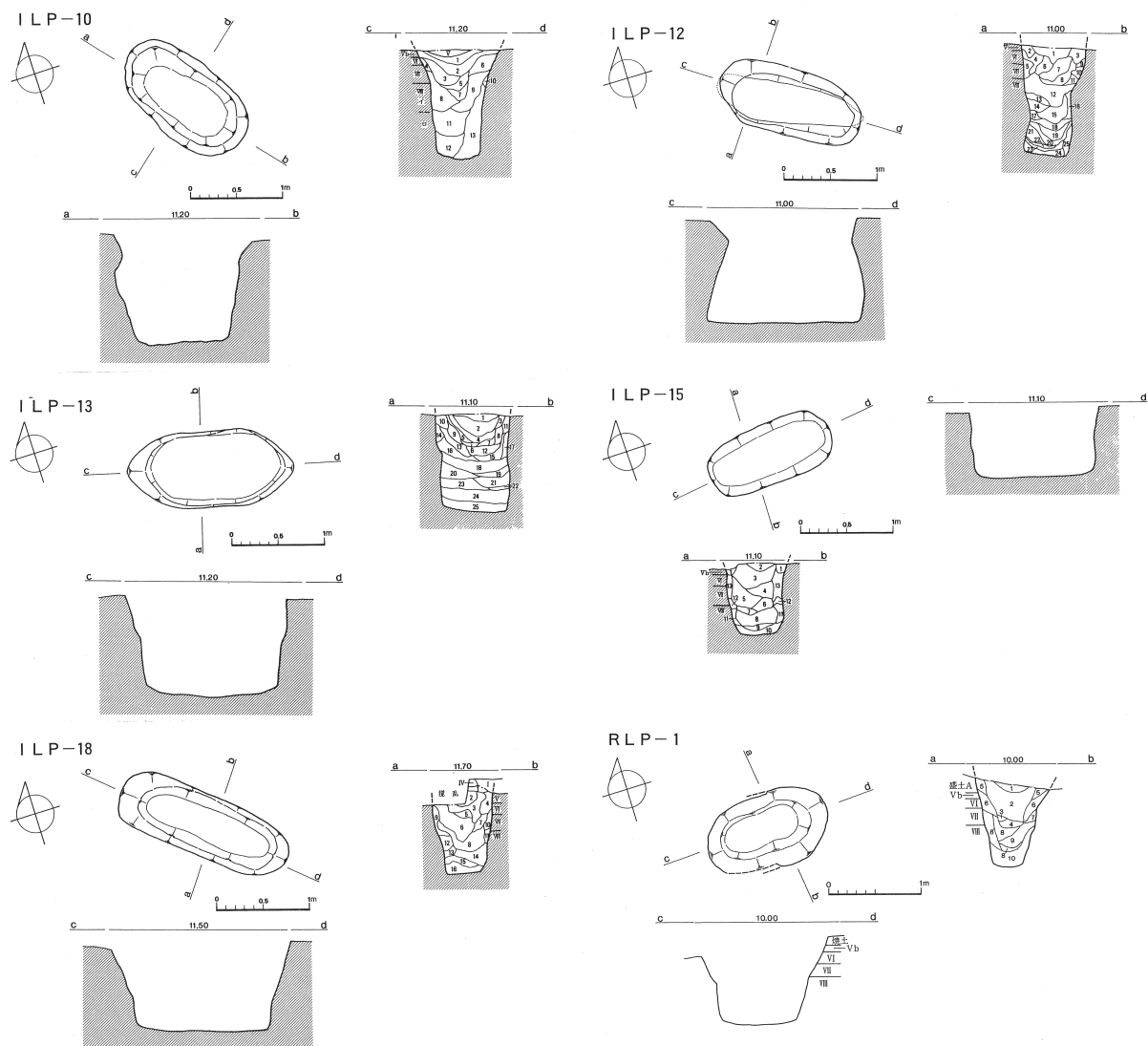
図Ⅲ-4 キウス4遺跡における墓壇群の位置

①南側墓墳群

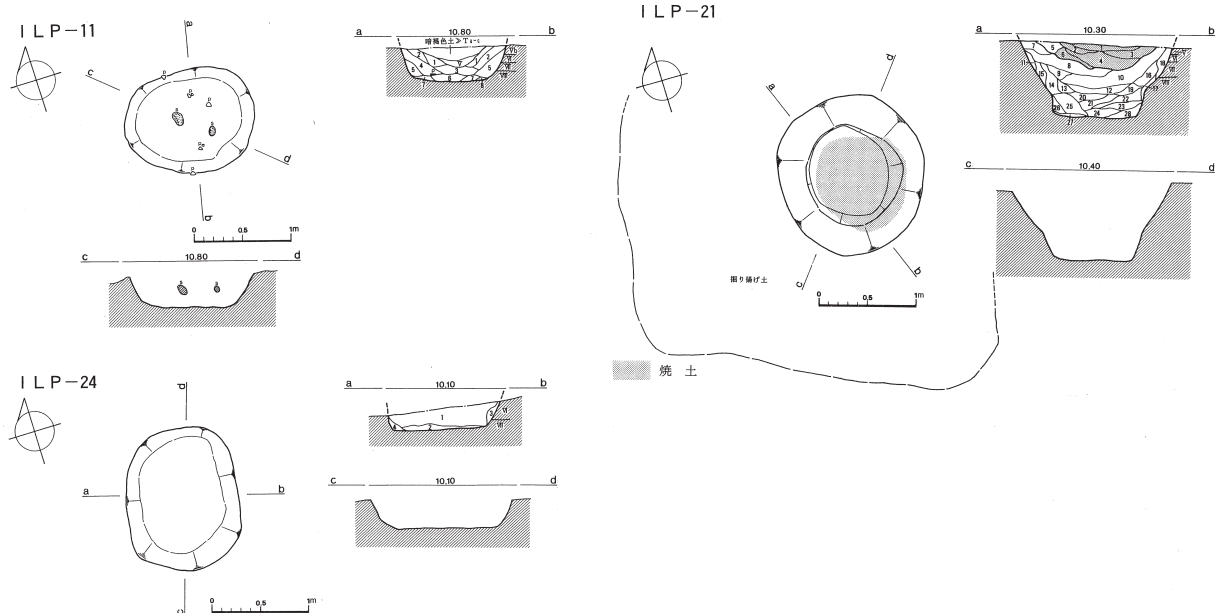


図Ⅲ-5 キウス4遺跡南側墓墳群(1)

キウス4遺跡 (10)

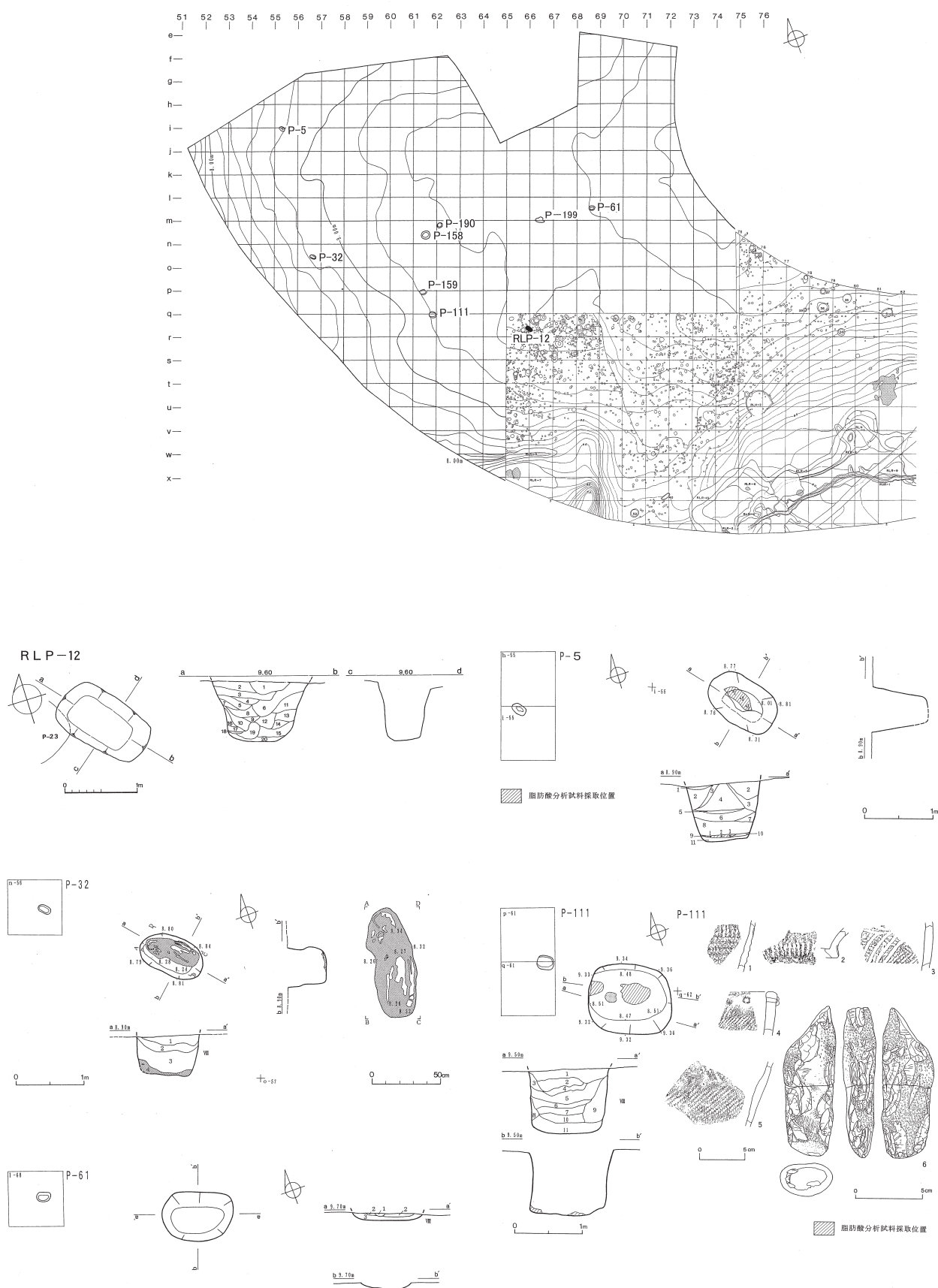


墓墳の可能性の低いもの



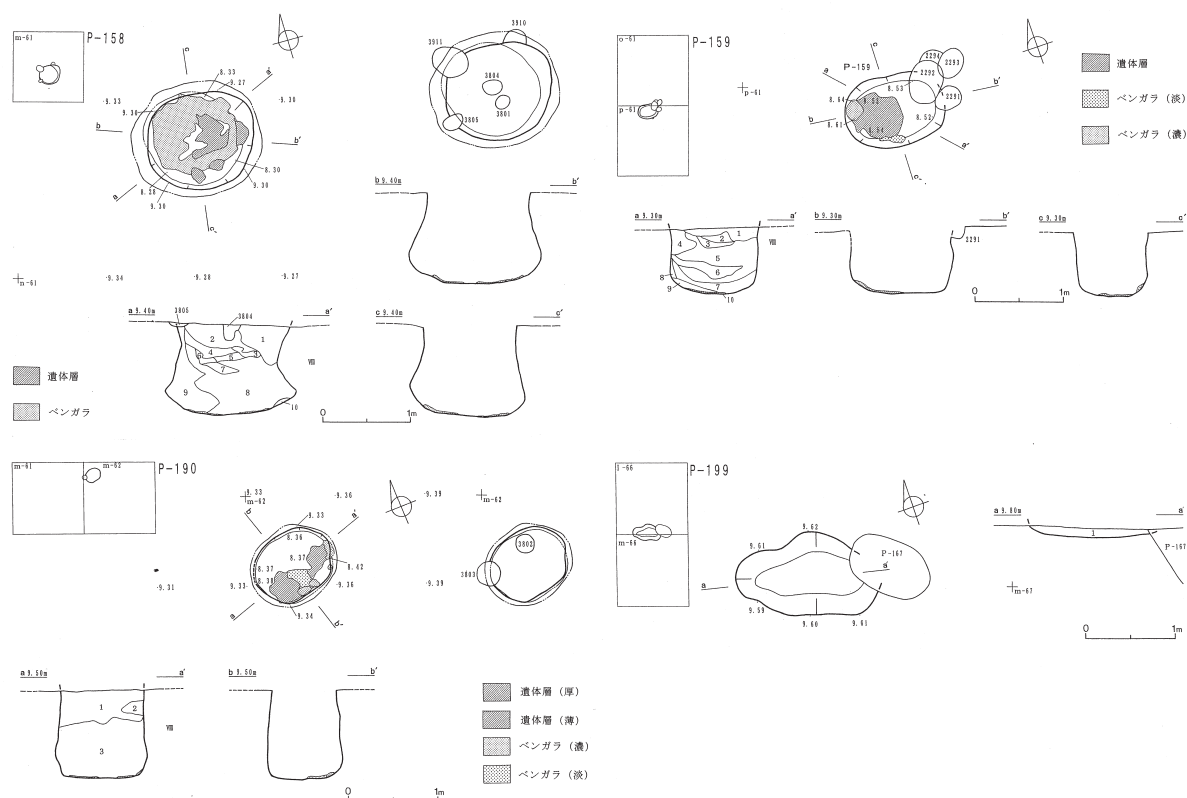
図Ⅲ-6 キウス4遺跡南側墓墳群 (2)

②南北盛土間墓墳群



図Ⅲ-7 キウス4遺跡南北盛土間墓墳群(1)

キウス4遺跡(10)



図Ⅲ－8 キウス4遺跡南北盛土間墓墳群(2)

2基が長軸方向を揃えて隣接しているものが3組見られる。墓墳長軸長は193～76cmとばらつきがあるが、160cmで2分され、160cm以上が伸展葬、以下が屈葬と推測されている。前者に属するものは4基、後者は10基である。副葬品やベンガラ、墓標が確認されたものは無い。なお、埋土上部をロームで充填したと考えられる墓墳が2基ある。

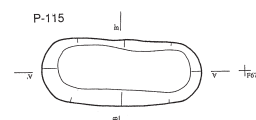
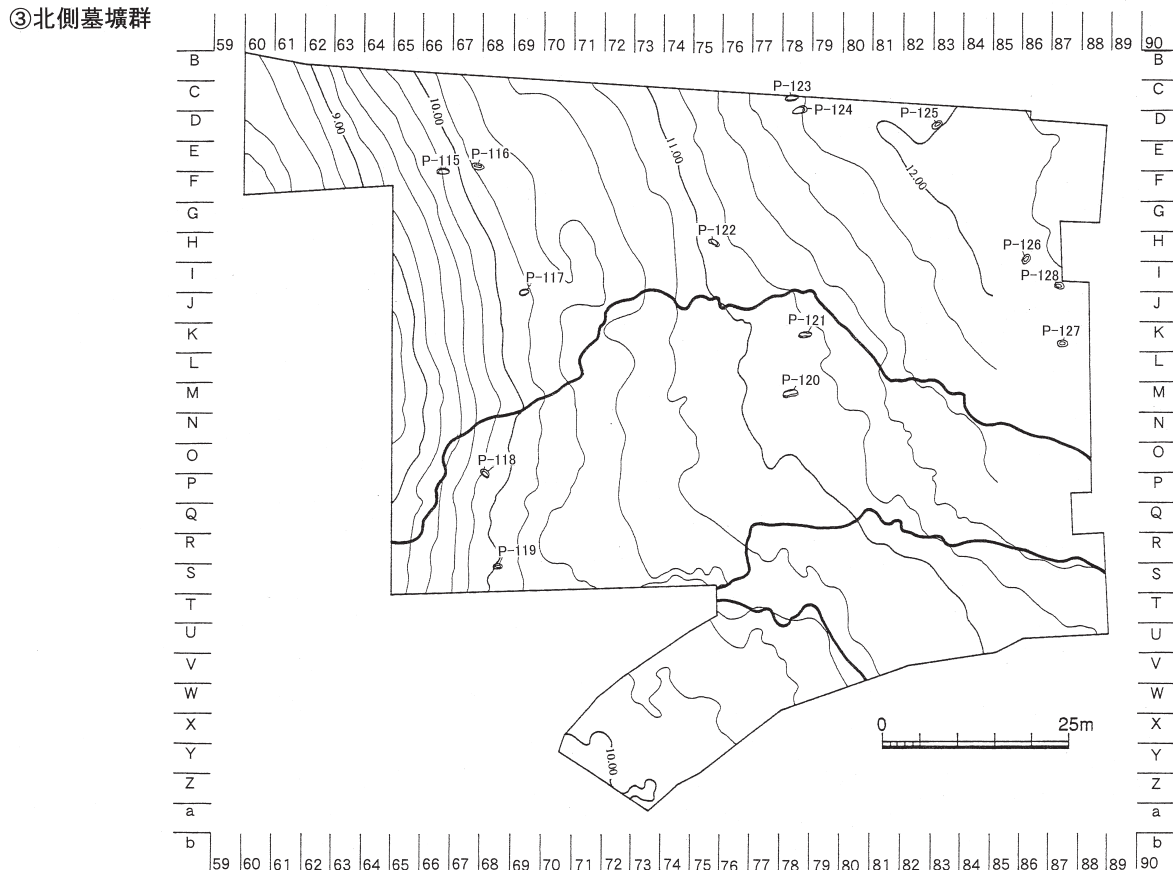
盛土遺構より下位で検出されたものがあることから、周堤墓や盛土遺構が営まれた時期のなかでも早い段階で構築された墓墳が存在している。また、規模においては長軸長ではバラツキが大きい、短軸長が短く、幅の狭いものが多いことが特徴である。

④周堤墓周辺墓墳群(D地区に分布するもの、図Ⅲ－11・12)

周堤墓周辺で確認された単独の土墳墓は13基である。この内2基は周堤墓X－10より古いものである。墓墳は調査区全域に散在しており、必ずしも周堤墓の周辺に偏在していない。なお、2基が長軸方向を揃えて隣接しているものが2組見られる。

13基中、人骨もしくは遺体層が確認できたものは12基である。このうち、ベンガラの撒布も見られたもの3基、副葬品が出土したものは1基である。周堤墓よりも古い2基は平面形が円形に近いものである。この他の11基は墓墳長軸長が150cm以上のものが9基、以下のものが2基と大型のものが多いこと、長軸長に比べて短軸長が狭いものが多いことが特徴である。これらは、X－12・13・15・αの周堤墓第1群とした古い段階の周堤墓の墓墳と類似しており、ほぼ同時期に作られたものと推測される。初期の段階の周堤墓では竪穴内に1～3基程度しか墓墳が作られないために、結果的に周堤墓外にも多くの墓墳が構築されたと考えられるのである。

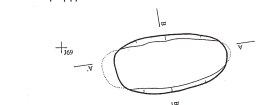
③北側墓域群



P-115の土層

層別	土層	土質	しきり	遺入物、その他	備考
1	10YR2/1	黒褐色土		Em-p115を多量に含む	横穴
2	10YR2/2	黒褐色土		Em-p115を多量に含む	
3	10YR2/3	黒褐色土	やわらか	Em-p115を多量に含む	
4	10YR2/4	黒褐色土	やわらか	Em-p115を多量に含む	
5	10YR2/5	黒褐色土	やわらか	Em-p115を多量に含む	
6	10YR2/6	黒褐色土	やわらか	Em-p115を多量に含む	

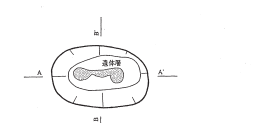
P-117



P-117の土層

層別	土層	土質	しきり	遺入物、その他	備考
1	10YR2/1	黒褐色土		Em-p117を多量に含む	横穴
2	10YR2/2	黒褐色土		Em-p117を多量に含む	
3	10YR2/3	黒褐色土	やわらか	Em-p117を多量に含む	
4	10YR2/4	黒褐色土	やわらか	Em-p117を多量に含む	
5	10YR2/5	黒褐色土	やわらか	Em-p117を多量に含む	
6	10YR2/6	黒褐色土	やわらか	Em-p117を多量に含む	
7	10YR2/7	黒褐色土	やわらか	Em-p117を多量に含む	
8	10YR2/8	黒褐色土	やわらか	Em-p117を多量に含む	
9	10YR2/9	黒褐色土	やわらか	Em-p117を多量に含む	
10	10YR2/10	黒褐色土	やわらか	Em-p117を多量に含む	
11	10YR2/11	黒褐色土	やわらか	Em-p117を多量に含む	

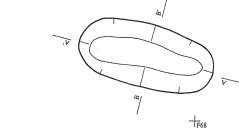
P-119



P-119の土層

層別	土層	土質	しきり	遺入物、その他	備考
1	10YR2/1	黒褐色土		Em-p119を多量に含む	横穴
2	10YR2/2	黒褐色土		Em-p119を多量に含む	
3	10YR2/3	黒褐色土	やわらか	Em-p119を多量に含む	
4	10YR2/4	黒褐色土	やわらか	Em-p119を多量に含む	
5	10YR2/5	黒褐色土	やわらか	Em-p119を多量に含む	
6	10YR2/6	黒褐色土	やわらか	Em-p119を多量に含む	
7	10YR2/7	黒褐色土	やわらか	Em-p119を多量に含む	
8	10YR2/8	黒褐色土	やわらか	Em-p119を多量に含む	
9	10YR2/9	黒褐色土	やわらか	Em-p119を多量に含む	
10	10YR2/10	黒褐色土	やわらか	Em-p119を多量に含む	
11	10YR2/11	黒褐色土	やわらか	Em-p119を多量に含む	

P-116



P-116の土層

層別	土層	土質	しきり	遺入物、その他	備考
1	10YR2/1	黒褐色土		Em-p116を多量に含む	横穴
2	10YR2/2	黒褐色土		Em-p116を多量に含む	
3	10YR2/3	黒褐色土	やわらか	Em-p116を多量に含む	
4	10YR2/4	黒褐色土	やわらか	Em-p116を多量に含む	
5	10YR2/5	黒褐色土	やわらか	Em-p116を多量に含む	
6	10YR2/6	黒褐色土	やわらか	Em-p116を多量に含む	
7	10YR2/7	黒褐色土	やわらか	Em-p116を多量に含む	
8	10YR2/8	黒褐色土	やわらか	Em-p116を多量に含む	
9	10YR2/9	黒褐色土	やわらか	Em-p116を多量に含む	
10	10YR2/10	黒褐色土	やわらか	Em-p116を多量に含む	
11	10YR2/11	黒褐色土	やわらか	Em-p116を多量に含む	
12	10YR2/12	黒褐色土	やわらか	Em-p116を多量に含む	
13	10YR2/13	黒褐色土	やわらか	Em-p116を多量に含む	
14	10YR2/14	黒褐色土	やわらか	Em-p116を多量に含む	
15	10YR2/15	黒褐色土	やわらか	Em-p116を多量に含む	

P-118



P-118の土層

層別	土層	土質	しきり	遺入物、その他	備考
1	10YR2/1	黒褐色土		Em-p118を多量に含む	横穴
2	10YR2/2	黒褐色土		Em-p118を多量に含む	
3	10YR2/3	黒褐色土	やわらか	Em-p118を多量に含む	
4	10YR2/4	黒褐色土	やわらか	Em-p118を多量に含む	
5	10YR2/5	黒褐色土	やわらか	Em-p118を多量に含む	
6	10YR2/6	黒褐色土	やわらか	Em-p118を多量に含む	
7	10YR2/7	黒褐色土	やわらか	Em-p118を多量に含む	
8	10YR2/8	黒褐色土	やわらか	Em-p118を多量に含む	
9	10YR2/9	黒褐色土	やわらか	Em-p118を多量に含む	
10	10YR2/10	黒褐色土	やわらか	Em-p118を多量に含む	
11	10YR2/11	黒褐色土	やわらか	Em-p118を多量に含む	

P-120

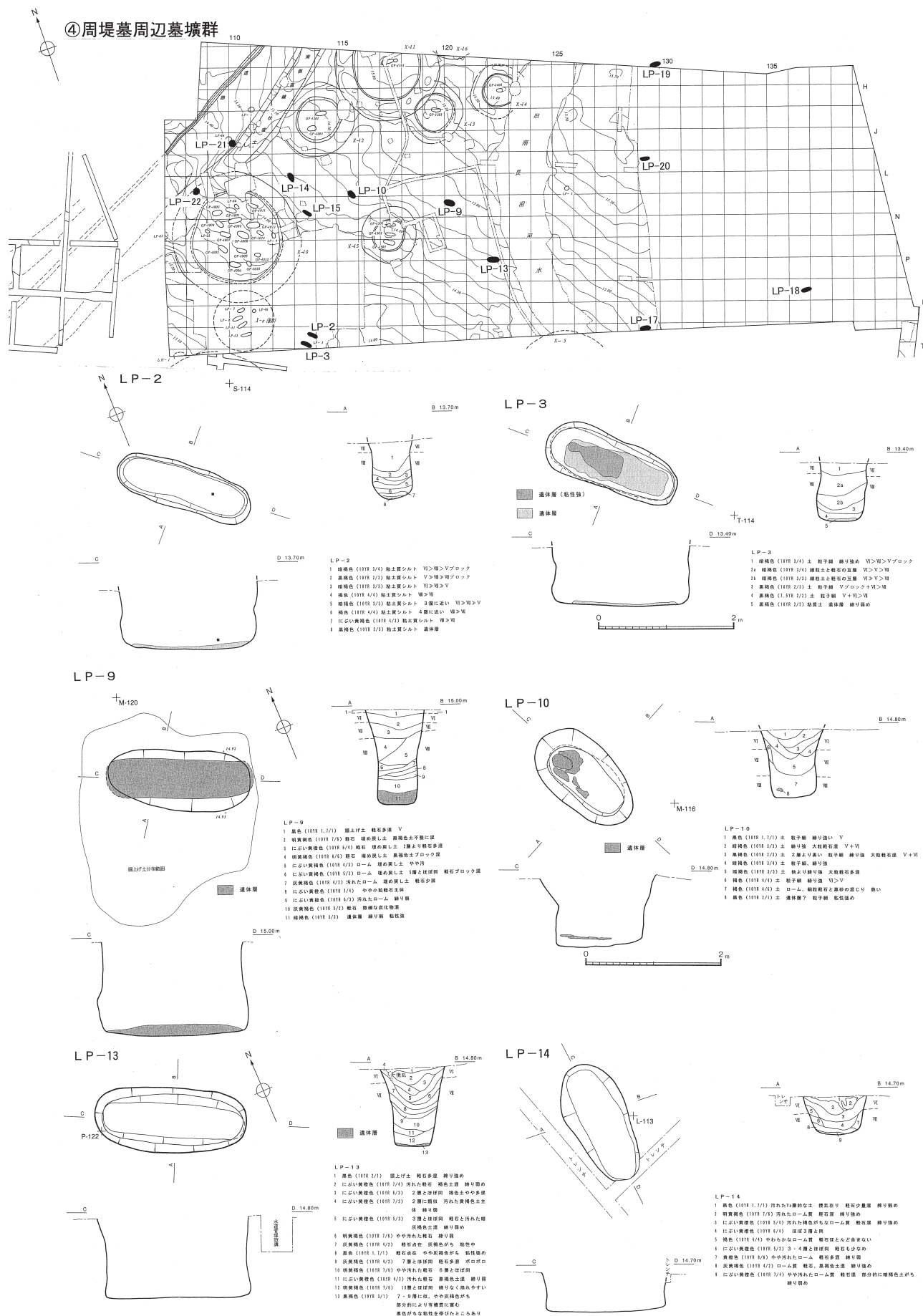


P-120の土層

層別	土層	土質	しきり	遺入物、その他	備考
1	10YR2/1	黒褐色土		Em-p120を多量に含む	横穴
2	10YR2/2	黒褐色土		Em-p120を多量に含む	
3	10YR2/3	黒褐色土	やわらか	Em-p120を多量に含む	
4	10YR2/4	黒褐色土	やわらか	Em-p120を多量に含む	
5	10YR2/5	黒褐色土	やわらか	Em-p120を多量に含む	
6	10YR2/6	黒褐色土	やわらか	Em-p120を多量に含む	
7	10YR2/7	黒褐色土	やわらか	Em-p120を多量に含む	
8	10YR2/8	黒褐色土	やわらか	Em-p120を多量に含む	
9	10YR2/9	黒褐色土	やわらか	Em-p120を多量に含む	
10	10YR2/10	黒褐色土	やわらか	Em-p120を多量に含む	
11	10YR2/11	黒褐色土	やわらか	Em-p120を多量に含む	

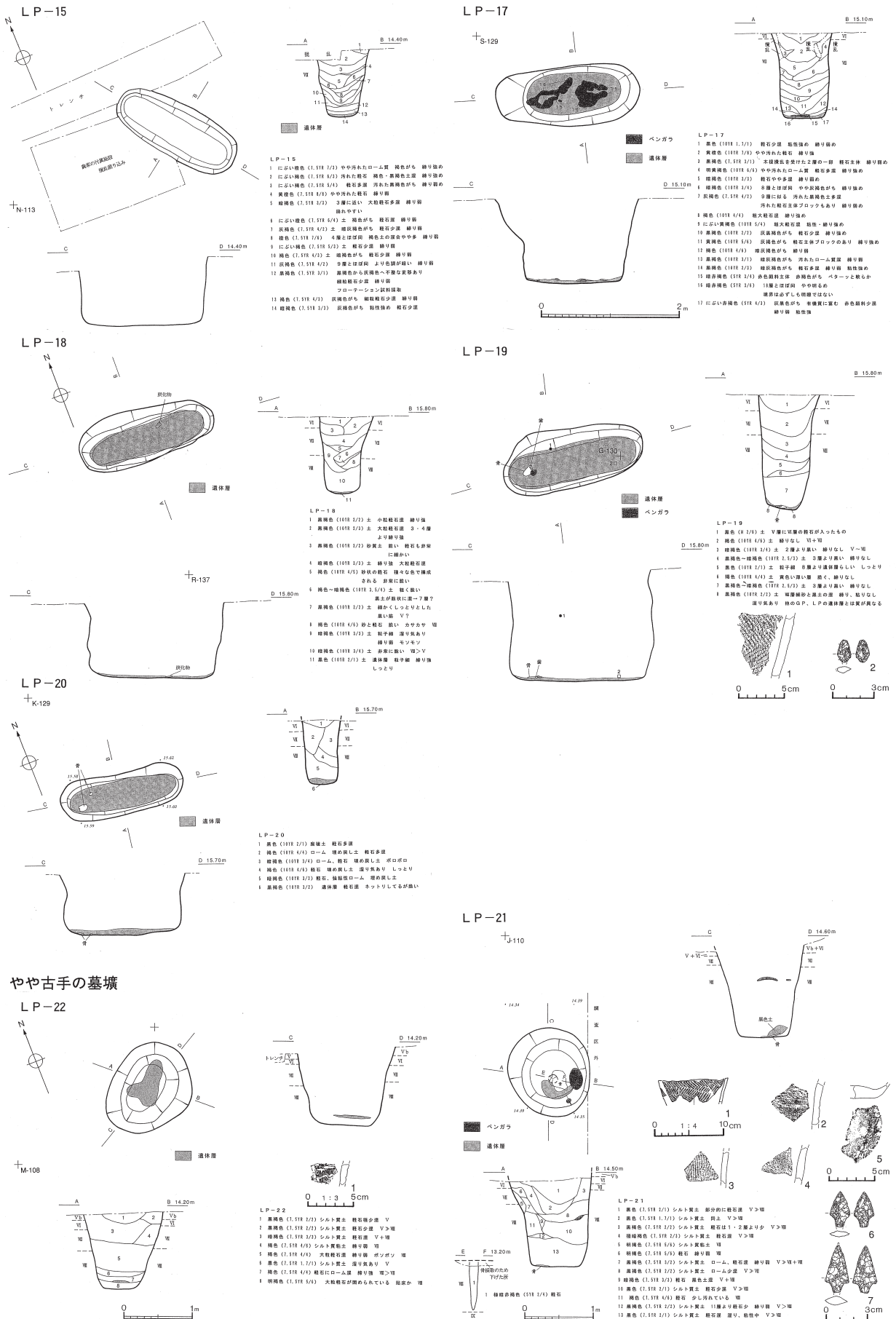
図Ⅲ-9 キウス4遺跡北側墓域群(1)

④周堤墓周边墓圻群



図Ⅲ-11 キウス4遺跡周堤墓周辺墓壙群(1)

キウス4遺跡 (10)



図Ⅲ-12 キウス4遺跡周堤墓周辺墓墳群 (2)

く短軸長が短い、細長いものが比較的多いとも言える。また、②盛土遺構間は長軸長が短く丸みを帯びた墓墳であり、④周堤墓周辺では長軸長が長く短軸長が短いものが比較的多く、第1群とした古い段階の周堤墓の墓墳に類似している。

墓墳の平面形や規模は構築された時期と密接に関連するものである。以前筆者は、周堤墓の構築順から墓墳の規模の変遷について触れたことがあった（藤原2000）。おおまかにまとめると、第1段階（古）＝丸みを帯びた墓墳と細長い墓墳の並存、中でも細長い墓墳の短軸長が短い、第2段階＝細長い墓墳の短軸長が次第に大きくなる、この段階でも丸みを帯びた墓墳と細長い墓墳が並存するが、両者の差が顕著ではなくなる、第3段階（新）＝長軸長が短くなり丸みを帯びるようになり、墓墳規模は均一化する、という変遷をたどると考えた。

これを周堤墓外の墓墳にも準用してみると、丸みを帯びた墓墳は第1～3段階のいずれにも存在するため時期の特定にはあまり有効ではない。しかし、周堤墓内墓墳で丸みを帯びたものと比べても、極端に丸いものは第1もしくは第3段階のいずれかと推測できるであろう。細長い墓墳については長軸長が長く、短軸長が短いものが相対的に古い傾向があると言える。

この他に、周堤墓外の墓墳群が構築された時期を特定するものとして、他の遺構との切り合い関係がわかる例が①～③にいくつかある。①南側では盛土辺縁部を切るものがあり、南側盛土形成時の最終段階以降に構築されたと考えられる。②盛土遺構間では建物跡群に切られるものがあり、建物群よりも古い時期の墓墳と推測できる。③北側では盛土遺構に覆われるものがあり、それよりも古い時期の墓墳と推測できる。

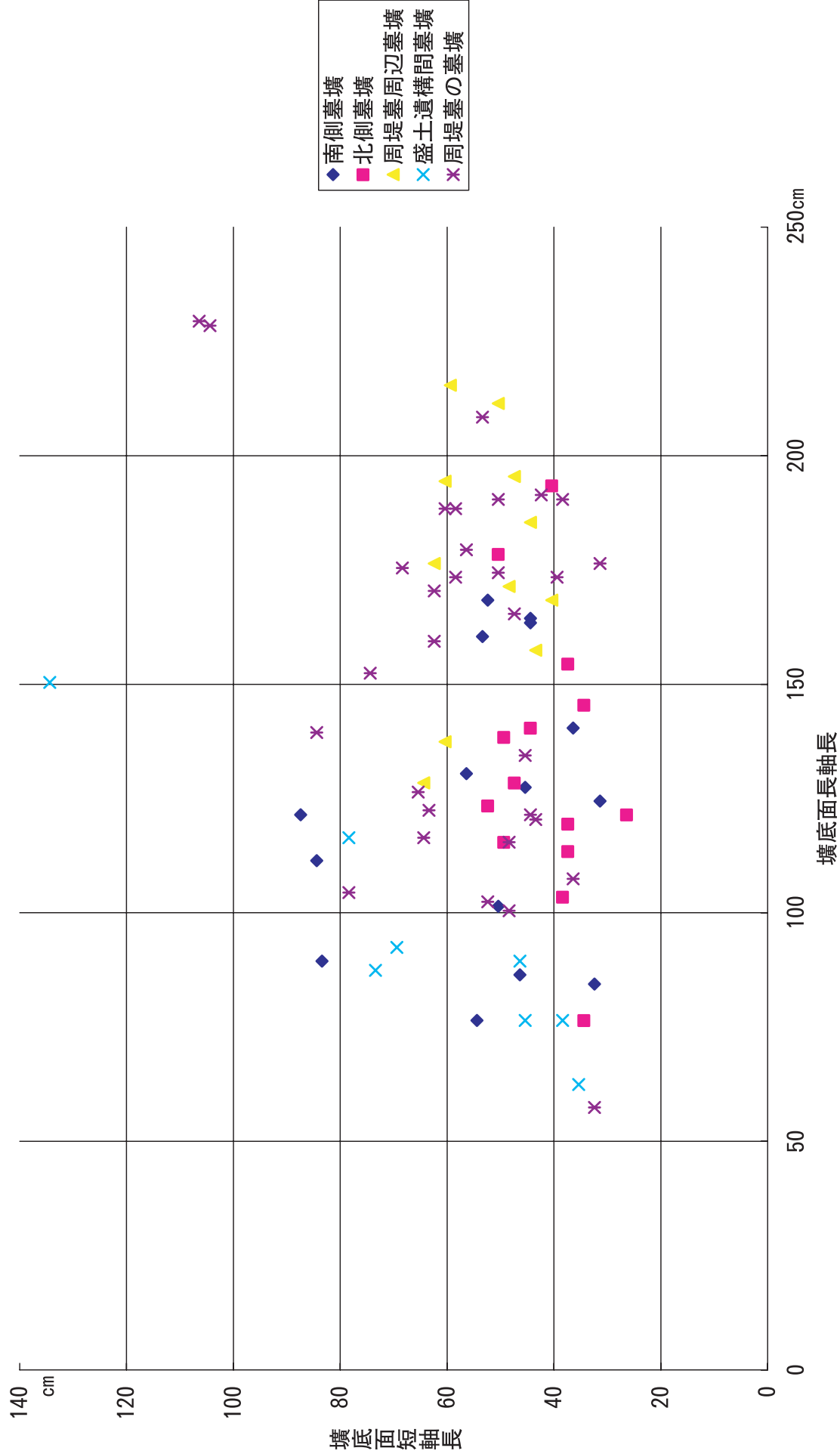
この墓墳規模の変遷と切りあい関係から墓墳群の構築順を推測すると、丸みを帯びた墓墳が多く、建物跡に切られる②盛土遺構間墓墳がもっとも古いものと言える。次いで、④周堤墓周辺墓墳では長軸長が長いこと、周堤墓第1群の墓墳に類似するものがあることからやや古手に位置付けられるであろう。残る①・③は新しい段階のものと考えられるが、両者には類似点が多く一概に結論付けることは出来ない。③北側では短軸長が短いこと、盛土遺構との新旧関係から①南側よりも③北側のほうが若干古いのではないかと推測される。

以上から、大まかには②盛土遺構間→④周堤墓周辺→③北側→①南側と墓域が変遷したと推測される（図Ⅲ－4）。しかし、②と④③①では差異が明瞭であるが、特に③と①では必ずしも特徴が明確に弁別できない。このことから、これら墓墳群は継起的に変遷していったのではなく、並存していた時期も長かったと推測される。なお、墓墳内の出土遺物がほとんど無いことから、出土土器による編年は出来なかった。

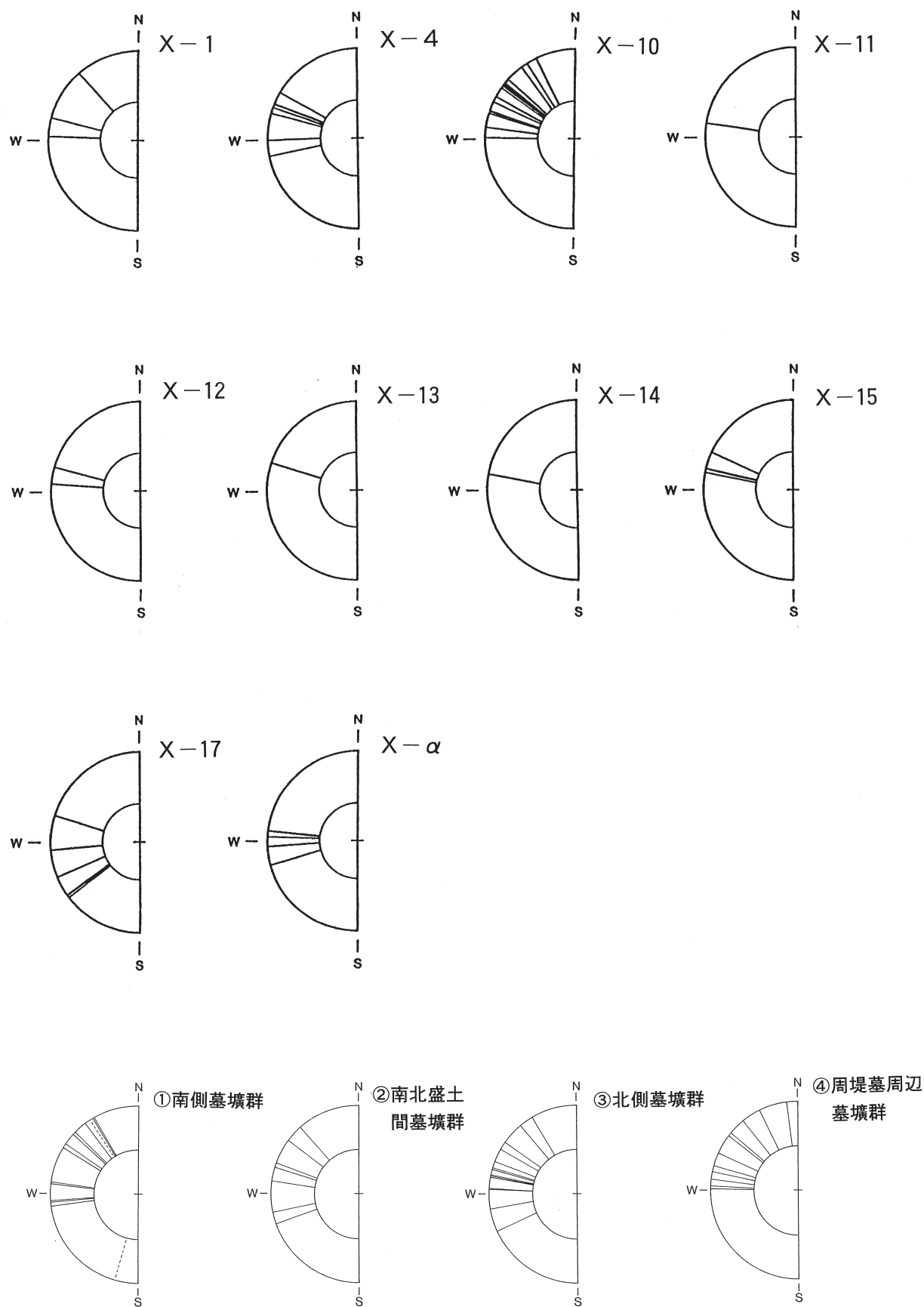
この変遷が認められるならば、キウス4遺跡における墓域の成立とその変遷については次のように考えられる。

縄文時代後期後葉の、キウス4遺跡で最初に集落が作られ始めた時期では、西側の集落周辺に隣接して丸みを帯びた墓墳が作られた。次いで、対置される東側に周堤墓が作られ、墓域としての性格が強まり、周堤墓内には細長い・丸い両方の墓墳が、周堤墓周辺には主に細長い墓墳が、作られるようになった。そして、墓域＝周堤墓周辺、対置される居住域＝建物跡群、広場＝南北盛土間、と遺跡内の空間配置も明瞭になってきた。

その後、周堤墓が大型化しはじめる周堤墓第2・3群に相当する時期以降に、周堤墓外の墓墳は南北盛土遺構の外縁部に対置して配置されるようになる。その詳しい時期については明瞭でないが、堂林式の新手の時期からあまり遡ることはないであろう。このような墓墳群の対置はおそらく周堤墓群の2分と関連するものであろう。周堤墓の分布は連続しているようにも見えるが、特に大型の周堤墓



図Ⅲ－13 キウス 4 遺跡周堤墓内・外墓墳の規模



図Ⅲ-14 キウス4遺跡墓墳の長軸方向